

(事例報告)

英国におけるハイカルチャーによる社会政策の取組事例 —ストリートワイズオペラにおけるホームレスの福祉の向上 と社会的包摂への取組—

Case study of social policy by high culture in the UK —Efforts to improvement of well-being and increasing of social inclusion in Streetwise Opera—

天野 敏昭

Toshiaki AMANO

英国のストリートワイズオペラ (Streetwise Opera) は、音楽とオペラを創作するワークショップ、作品の上演、活動に附随する裏方の仕事、職業訓練・職業紹介などへの参加を通じて、主にホームレスが、自信を持って人生を切り開いていく手助けをしている。ホームレスの社会的な自律及び経済的な自立において、芸術文化活動の体験が、福祉の向上や社会的包摂の達成あるいは人々の幸福感の向上にもたらす効果は、評価の難しさや企画・実施に伴う知見の不足などの課題もあり、これまで十分に検証が重ねられてきたわけではない[河島,2014]。しかし、ストリートワイズオペラは、2002年の活動開始後すでに10年以上の実績を重ね、活動の実践に加えて、その効果測定とその手法の検証と見直しにも注力し、近年は国内外の関係組織とネットワークを構築し、取組や手法などの共有に向けて活発な交流活動を展開している。

本事例報告は、一般的に、ホームレスが接する機会の少ない文化資本と考えられる、ハイカルチャー¹の一つであるオペラが、社会政策で扱われる問題にどのように機能するのかという点に着目し、先行的な取組であるストリートワイズオペラの動向を紹介する。最初に、活動の契機と組織の概要を概観した上で、次に、活動の経過をみていく。さらに、活動の効果測定と

¹ ここでいうハイカルチャーは、一定の知識や教養を持つ者が主に享受すると考えられる達成度の高いとされる文化である。例えば、古典文学や詩歌、美術、クラシック音楽、基礎的学問などが想定される。ハイカルチャーと大衆文化は対比される場合があるが、実際には、相互は明確に区分できない側面を持っている。

評価の現状をみていき、最後に、芸術文化活動による福祉と社会的包摂の向上の取組の意義と今後の展望について、英国の社会政策と文化政策の動向との関係性にもふれながらまとめることとする。

1 ストリートワイズオペラの概要

ストリートワイズオペラ (Streetwise Opera/以下、SWO)²は、2002年7月12日に登録・創設された保証有限会社 (company limited by guarantee)³で、ホームレス⁴を主な対象にして、オペラの創作と上演の取組を行っている団体である。活動の契機は、2000年のある新聞に掲載された「ホームレスは、観客がオペラハウスを出て真っ先にまたぐ人」という、政治家の発言である。このため、活動の目的には、ホームレスに対する社会一般(公衆)の認識や態度を変えることへの挑戦や政治的なメッセージの表明も含まれている。創設者の Matt Peacock 氏は、自身が制作した「The Little Prince」の公演がロイヤルオペラハウスで成功を収めるなど、優れた音楽ジャーナリストでオペラの批評家としても活躍すると同時に、ホームレスのシェルターでサポートワーカーの仕事にも携わり、ホームレスの問題に具体的にどのように対応できるのか考えてきた経緯があった。

活動の目的は、第一に芸術教育の推進で、特にオペラ芸術が人々にとって排他的でないことを目指すことであり、第二にホームレスの人々を難局から救うことである。活動では、ホームレスにとって必要と考えられることの充足よりもむしろ達成を、そして負の烙印を称賛に変えることが重視され、活動内容に一切の妥協やひいきを持ち込まない方針が貫かれている。生活の立て直しよりも前向きな将来を見出すことに主眼をおき、訓練を受けたプロの音楽家によって進められるワークショップを通じて、質の高い創造的な活動が行われている。そうすることで、自尊心や社交性の醸成、芸術性の高い作品の提供に加えて、観衆や疎遠であった家族・知人から尊敬を受けるケースもみられ、コミュニティへの統合に大きく前進する可能性が期待できる。活動開始直後から、参加したホームレスから「次は何をするのか」と問われるなど関心を持たれ、ホームレスセンター「Booth Center」などと連携して同センターで開催される音楽ワークショップから発展してきた。これまで10を超える作品を上演し、最新作の「The Passion」(5頁を参照)は、「The Times」での5つ星の評価をはじめ、「The Guardian」、「New York Times」

² (ウェブサイト URL) <http://www.streetwiseopera.org/>

³ 社会的企業の制度である Community Interest Company (CIC)の一つで、会社形態を採用しつつも、利益配当を目的としないことを前提として社会の利益のために活動する法人形態(経済産業政策局産業組織課[2015]「海外における社会的企業についての制度等に関する調査報告書」)。

⁴ ホームレスの定義は、国によって異なる。日本では、「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」である(ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法第二条)。英国ではより広範で、「占有できる住居を持っていない」、「そこに立ち入ることのできないか、居住に適しない車輛や船である場合」、「そこを所有継続するのに合理的な理由のない場合」、「28日以内にホームレスになるおそれがある場合」(Housing Act 1996 part VII)である。日本では失業を契機にホームレスになるケースが多い一方、英国では、貧困などを背景とする家庭内暴力、アルコールや薬物への依存症などを契機にホームレスになるケースが多い。

などでも高い評価を受け、BBC などでも放送された。また、本公演のほかに 2014 年 6 月には、ロイヤルオペラハウスとの共同プロジェクトとして、17 人のメンバーがプーランクの「Dialogues des carmélites (カルメル派修道女の対話)」の公演(サイモン・ラトル指揮)に合唱で参加し、プロの音楽家の公演に参加する前例のない取組となり、活動の契機になった政治家の発言への応答ともいえる歴史的な出来事として大きな反響があった。このように、活動は、音楽評論の分野と社会変革の両側面で大きな注目を集めている。

活動は、創設者で代表者の Matt Peacock 氏、スタッフチーム、ワークショップリーダー、サポートワーカー、ボランティア、出資者、役員会(理事会)など多くの人々や組織によって支えられている。また、活動資金の内訳は、Big Lottery Fund(くじ基金)、アーツカウンシルイングランド、マッコーリーグループ財団、カルースト・グルベンキアン財団、ブリティッシュカウンシルなどをはじめとする多様な組織・団体の拠出の占める割合が 97%と大きく、事業収入のウェイトは極めて小さいが、資金調達先を相当数に分散させることで、年限のある助成が断絶しても活動中止などの支障が出ないようにリスクを回避すると同時に、活動に対する理解を広げ深化させることを重視している。2016 年度は活動の規模が拡大し資金調達額(収入)は前年度比で 56%増加している⁵。管理組織は、後援者、受託者(Trustees)、スタッフ⁶、登録監査人、銀行家などで、Trustees は、活動の意思決定や運営全般に関与し、「事業及び財務報告書」を毎年発表している。

例えば、2014 年度は、ワークショッププログラム、芸術的政策、国際プログラムの 3 分野の発展に照準を当てた初年度にあたり、後述するホームレスの状況に応じた 2 段階のワークショップを設ける実施体制の確立、事業評価事業に取り組む Charities Evaluation Services 及び専門家との協働による新たな測定手法の検討、国外でのプロジェクトの推進、国内の優れた芸術家と協働する取組など、複数の取組が戦略的に進められた。近年は、国際的なネットワークの構築に注力しており、2012 年の Cultural Olympiad の際に Royal Opera House で最初の催しが開催されたのを契機に、国外の、芸術やホームレスを支援する関係組織とネットワークを築き、「With one voice」プロジェクトを中心的立場で推進し、政策や実践に関する情報交換

⁵ 活動の収支(2016 年 3 月末時点)は、総収入£905,214(内訳:信託・基金 38%、公的資金 43%、企業による支援 9%、個人の寄付及び資金調達イベント 5%、ワークショッププログラムなどの事業収入 2.7%、投資収入 0.3%など、クラウドファンディングのキャンペーンも行っている)、総支出は£840,545(資金調達経費 7%、ワークショップ事業費 37%、作品制作事業費 34%、国際交流事業費 13%、その他事業費 4%、支援経費 5%)である。公演回数増加や国際交流事業の展開などを背景に、前年度より金額が増えている(2015 年度:総収入£581,750、総支出£561,839)。

⁶ フルタイムとパートタイムのスタッフ各 9 名で構成される。役割分担(肩書)は、Chief Executive/General Manager/Head of Development/Artistic Director of Workshops(パートタイム)/Programme Producer/Producer(International)(パートタイム)/Marketing and Communications Manager/Progression Manager/London Co-ordinator/Newcastle/Gateshead Co-ordinator(パートタイム)/Nottingham Co-ordinator(パートタイム)/Manchester Co-ordinator(パートタイム 2 名)/Middlesbrough Co-ordinator(パートタイム)/Evaluation Officer(パートタイム)/Office Manager/Project Assistant である。

や交流を通して、芸術とホームレスの関係性を深化させる国際的な運動を本格化させている⁷。これは、オリンピックの開催国が中心となり、世界中の芸術とホームレスに関わる組織が集うもので、2015年から2016年にかけて、ブラジルの Cultural Olympiad において、300人以上の出演者と40以上のワークショップで国際的な交流が行われ、2020年には日本でされる計画である。日本とのつながりは、2008年以来、ブリティッシュカウンシルの働きかけもあって、NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）が実施している、ホームレスを含む幅広い人々を対象とする「釜ヶ崎芸術大学 (a local arts university for homeless people)」などと協働し、2020年の東京オリンピックに向けて、ノウハウや知識の共有などを図り、ホームレスの問題の認知の向上や支援手法の開発に取り組んでいる。

このように、活動は国内外に広がりを見せており、2017年4月以降は、CEO の Matt Peacock 氏が Artistic Director の職務と国際的な動きを主導する活動に専念するため、新たな運営責任者が就任して新たな組織体制を構築し、国内外の活動の一層の充実を図る計画である。同年7月には活動15周年を記念し、5人の作曲家が5分の合唱曲を作曲するために参加者と協働する予定もあり、組織と活動は、発展に向けて大きな転換期を迎えている。

2 活動の経過

主な活動は、英国の6都市（ロンドン、マンチェスター、ノッティンガム、ミドルズブラ、ニューキャッスル/ゲーツヘッド、カーディフ）のホームレスセンターや文化施設等で定期的に行われるワークショップと毎年行われるオペラの公演で、参加者の年齢層は、若年者から90歳まで幅広い。オペラの上演のほか、舞台衣装やテロップ（字幕）の制作などの裏方作業も行い、アイデンティティの獲得（回復）や創造性の変化（向上）を実感できる機会を得られ、観衆のスタンディングオベーションなどの称賛が自信の回復にとって大きな意味を持つ。また、ワークショップに継続的に参加することで、非日常ともいえる公演後の燃え尽きに陥る状況を防止し、生活のリズムを確立することにも有効に機能する。さらに、前進する機会として、コミュニティへの統合や職業訓練・職業紹介にも力を入れており、参加者の関心に応じて、舞台裏、制作、カフェ、事務等の経験の機会を提供し、芸術と仕事に橋をかけることを意識した活動も進められている。

活動の基本となるワークショップには2段階あり、第一段階の「Drop-in Singing and Acting sessions」は、現在ホームレスである人々を対象に、生活を立て直し、より積極的な未来を見出すことを主眼に、ホームレスセンターで毎週行われる⁸。第二段階の「Explore Singing and Acting sessions」は、ホームレスを経験した人、孤立して生活している人、楽しみを見つけた地域の人々を対象に、芸術文化やコミュニティの拠点で行われる⁹。参加者は状況に応じて、

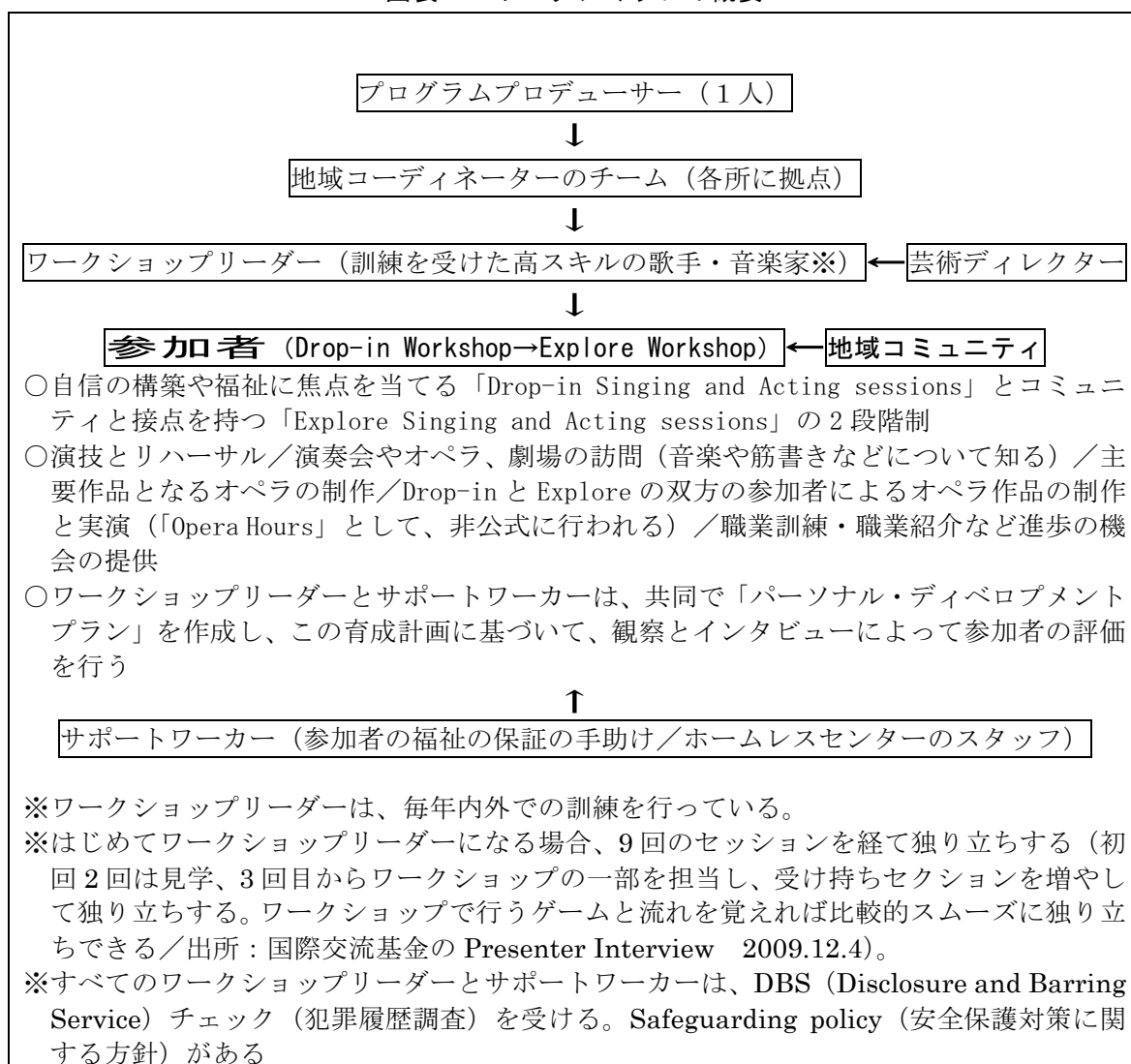
⁷ (ウェブサイト URL) <http://www.with-one-voice.com/>

⁸ 歌や身体ウォームアップ、オペラの物語やあらすじの理解、主要な合唱曲とアリアの経験、演じる技術と登場人物の理解、楽譜が読めなくても耳で音楽を学ぶ経験、簡単な舞台公演とオペラの一部の場面の上演などの取組が行われる。1年のうち48週間行われ、参加者の状況によっていつでも参加できる。

⁹ 劇場の見学、演じる機会、職業訓練・職業紹介、他の創造的な活動、専門的なオペラ制作などが行われる。さらに、各期間に1つのオペラプロジェクトが行われ、演じる技術に焦点をあ

「Drop-in」から「Explore」へとワークショップの段階を進め、「Explore」では、地域のコミュニティ組織との関わりを経験する。2014-2015年の例では、ミドルズブラではコミュニティベースのプログラムMMA、ノッティンガムではTheatre Royalとロイヤルコンサートホール、ロンドンではスイス教会などの様々な場所で開催され、地域に開かれた取組として行われている。

図表1 ワークショップの概要



活動の大きな特徴は、芸術作品としての質の追求である¹⁰。クラシックの楽曲等を題材にし

てる、ボランティアの機会、仕事体験の獲得、グループ内での責任の分担などの取組も含まれる。このワークショップは期毎に行われ、参加者は各期の最初の6週間以内に参加することができる。

¹⁰ Matt Peacock氏が影響を受けたという、ホームレスと一緒に芝居を創作する「Cardboard Citizens」のように、ホームレスが直面する問題などを芝居の題材にするといった「フォーラム・シアター」と異なる。

てオペラを創作し、2002年から2005年までは、ブリテン、マーラー、ヘンデル、ジミ・ヘンドリックスの楽曲を使用してオペラ作品を上演し、2006年以降は、現代の作曲家に作品を委嘱して新作のオペラを制作し、音楽評論家の批評の対象になる芸術作品として成立することを重視している。2008年に制作した「My Secret Heart」のケースでは、アレグリ作曲の『ミゼレーレ』を使いたいと提案を出したが、基本的に作曲家や映像作家の自由に委ねており、芸術の持つ自由な発想が尊重され、参加者の表現に対しても同様の姿勢をとっている。

先述した通り、2014-2015年はそれまでの活動から大きな変化がみられた年度で、ワークショッププログラムを優先的に発展させる戦略、大きな本公演とともに「Little Opera season」と称する30分程度の作品の公演（2014年12月に「The River Keeper」でスタート、希望・望みなどがテーマ）を含む新たな制作サイクル¹¹、国際交流事業の「With one voice」の拡充などの取組が始められた。また、活動の効果測定の面でも、Charities Evaluation Services、フリーランスの専門家、測定に関するコンサルタントなどとともに、モニタリングと測定のシステムをより分かりやすく効果的な内容に改訂する方向で、福祉と社会的包摂の向上の観点から徹底的に見直しが行われた。

2015-2016年は、2年毎に上演する主要な新作オペラとして、バッハのマタイ受難曲を短縮したオペラ「The Passion」を Penny Woolcock の指揮と James MacMillan の作曲のもとで制作し、古楽合唱団の The Sixteen、マンチェスターの文化施設 HOME と連携し、2016年3月25日と26日に、マンチェスターの現在は使われていない青果市場「Campfield Market Hall」で公演が行われ、チケットは完売した。このほか、「Little Opera season」におけるオペラの制作と公演、ホームレスの実態やその問題への取組の経験などを諸外国と共有するため、「Rio 2016 Cultural Olympiad」の一部をなす「With One Voice Brazil Project」などが進められた。

2017年は活動開始後15周年の記念の年にあたり、2002年の最初の作品であるブリテンの Canticles に呼応するオリジナルの作品を制作するため、100名以上の応募者から5名のレジデンス作曲家を選んだ。PRS for Music Foundation の支援を受け、各作曲家は、英国内5地域で出演者と協働し、3-5分間の合唱曲を作曲することになっており、作品は、2017年のはじめに非公式で上演される予定である。また、2018年の春には、Sage Gateshead 及び Royal Northern Sinfonia と共同制作した作品を世界初演する予定で、ブリテンの Cabaret Songs を特集した内容である。

近年注目されるのは、ワークショップやオペラ公演の活動における芸術面の成果の充実に加えて、社会との接点が広がっている点である。先述したロイヤルオペラハウスにおけるオペラ公演への合唱での参加は、既存のクラシック音楽のコミュニティへの統合の一例といえ、社会

¹¹ 2015年の5月にはノッティンガムの Nottingham Contemporary で「To the Silkwood Tree」（遠くからの声に導かれた旅行者がより良い生活に向けて旅をするが、最終的には出発地点に戻って来る内容で、自分自身で見出していくことを認識する）が、地元のソプラノ歌手の参加を得て上演された。この公演のチケットは完売し170人の観衆を集めた。また、同年7月にはロンドンの Tête à Tête Festival の開始に際して、The Place theater で「People Watch」（TV視聴を探索する内容で、純粋な娯楽かシニカルな番組かどうか、有名人の実話シリーズ、タレントショー、コマーシャルソングなどの人気テレビプログラムをもとに、認識していく内容）が、地元の四重奏団と歌手の参加を得て上演された。この公演のチケットも完売し280人の観衆を集めた。

的包摂の進展に寄与し得る出来事であったと考えられる。また、職業訓練・職業紹介の面では、ワークショップのサポートや公演の裏方の仕事などにボランティアとして関わるほか、SWOについて各所でプレゼンテーションするなど主体的に行動する経験を与えられ、自らの発展を実感できる可能性のある複数のプロジェクトが行われ、これらの経験が、社会参加や就労への道筋を前進させる可能性の高まりがみられる。その一つの現れとして、これまでの活動が、芸術、チャリティ、健康の各方面の複数の顕彰事業で評価を受け¹²、賞賛のコメントの一例として、英国元首相のゴードン・ブラウンの著書「Britain's Everyday Heroes」の中で、「Streetwise Opera is one of the most innovative charities of the decade」と紹介されたように、革新性を持った活動団体だと評価されていることからもうかがえる。このように、政治や政策の観点からみると、SWOは、図表2に示すように、芸術作品の創作と実演で高い品質を追求するだけでなく、社会に変化（ソーシャル・イノベーション）をもたらす主体としても一定の評価を受けている活動だといえる。

図表2 これまでの上演作品

上演年	上：作品名、下：（上演場所）	特徴、反響
2002	The Canticles（カンティクル） （ウエストミンスター寺院）	英国の作曲家 Britten の声楽曲を使用。Tête à Tête Opera Festival と共同制作。The Times, The Gurdian, The Independent, Opera 等の各紙で高評
2003	A Ceremony of Carols （New College, Oxford）	英国の作曲家 Britten の合唱曲を使用。Oxford の 5 つのホームセンターと New College Choir が共演。New York Times, Opera Now 等の各紙で高評
2004	Time Flows （Trinity Buoy Wharf）	ヘンデルとジミ・ヘンドリックスの曲を使用。London Handel Festival と共同制作。Opera Now, Evening Standard, Time out 等 5 紙で高評。
2005	Rückert Lieder （Nottingham Council House）	マーラーの有名な歌曲連作集を使用。Nottingham Evening Post, Opera Now, The Gurdian, The Independent 等の各紙で高評
2006	WHIRLWIND （Hall Two, The Sage Gateshead）	初のフルオペラ。損失とその後により深い希望がもたらされる内容などについて、The Gurdian, Independent on Sunday 等の各紙で高評
2007	CRITICAL MASS （Almeida Opera Festival と共同制作）	様々な国の民謡や愛の歌などを集めて国際サミットにおけるオペラとしてまとめあげ、ボーカルグループ The Shout と共演。The Times 等で高評
2008	MY SECRET HEART （Luzern, Royal Festival Hall）	17 世紀のアレグリの合唱作品「Miserere Mei」にインスピレーションを受けた作品で、音楽と映像を融合した作品で、世界中で上演された

¹² 「Arts Awards」では、Arts & Business Awards 2013, BP Long-term Partnerships (Winner) / Opera Awards 2013, Accessibility (Finalist) / Gramophone/ The Times Music in the Community 2009 (Winner) / British Composer Awards (for Mira Calix, My Secret Heart) 2009 (Winner) / RPS Awards 2008, Audience Development (Winner) など。「Charity Awards」では、Andy Ludlow Homelessness Award 2008 (Winner) / Charity of the Year 2008 (Highly Commended) / Third Sector Awards 2008 (Finalist) / National Lottery Awards 2010 (Runner-Up)。「Health Awards」では、Royal Society for Public Health Arts and Health Award 2011 (Highly Commended)。そのほか、Idology 'I'm Possible' Award 2005 (Winner) / Social Innovations Welfare Award 2003 (Winner) など。

2010	FABLES - A FILM OPERA (Spitalfields Winter Festival)	4つの短編映画を組み合わせた作品で、参加者、作曲家、映画製作者が協働。エディンバラ国際映画祭など多数のフェスティバルで上演された
2012	WITH ONE VOICE (Royal Opera House)	ロンドンオリンピックの関連フェスティバルの一部として、300人が参加し、芸術とホームレスの関係組織の国際ネットワークの幕開けとなった
2013	THE ANSWER TO EVERYTHING (BFI Southbank)	Britten, Handel, Vivaldi の音楽を使用。映像とオペラの実演の双方向の作品。架空の開発業者の会議の設定の中で、出演者と観衆が交錯する
2014	THE RIVER KEEPER (Gateshead Old Town Hall) (Middlesbrough Town Hall)	Little Opera season の最初の作品。100年以上川岸に住んでいる川守が、人々の希望や夢を育む姿を見ている作品で、参加者が作家の Nell Leyshon に話した話に基づく作品。作曲家の Bridie のフォークバンドが演奏で参加
2015	TO THE SILKWOOD TREE (the Nottingham Contemporary)	Little Opera season の作品。旅人が、未知の到着地への長く不確かな道のりに直面し、耳元の歌の囁きを聴きながらよりよい場所を探し続ける内容
	PEOPLE WATCH (The Place theatre)	Little Opera season の作品。テレビで視聴する内容に基づく作品。リゲティ四重奏団と歌手と共演。Tête à Tête: The Opera Festival 2015 で上演
2016	THE PASSION (Campfield Market, Manchester)	バッハのマタイ受難曲を使用。The Sixteen とともにイースターのための作品として制作。BBC Four で放送された
	UMA SO YOZ (Rio, 2016 Cultural Olympiad)	リオ五輪の一環で「With One Voice」として、300人が、公演、トーク、ワークショップ、音楽、ダンス、詩、演劇など 40 の上演に参加

3 活動の効果測定と出口支援

活動の効果測定は、①基礎的なデータとなる、調査項目に沿った様式に基づく、参加者を対象とする調査のほか、②フォーカスしたグループに対して行われる、参加することに対する意識や活動の有効性に関する調査、③ワークショップリーダーやサポートワーカーによる芸術及び福祉の両側面からの個人の変化に関するフィードバック評価（情報収集）¹³、④連携する関係機関からの情報収集など、様々なモニタリングツールを活用し、時系列の変化を追跡するプログレスレビューも交えて、広範で複合的な評価を組み合わせ、多面的で客観的な効果測定が行われている。評価手法は、外部のコンサルティング会社と共同で開発し、定量と定性のいずれの評価手法も同等に重視して組み合わせ、測定した効果を一目で分かるように樹形図化（evaluation tree）し、積極的に情報公開している。組織内に効果測定の専門担当スタッフが在籍し、評価手法の改訂に継続的に取り組むとともに、蓄積された手法や考え方を国外の関係組織とも共有を図りつつある。効果測定は、活動の効果を客観的に把握し、今後の活動方針に

¹³ モニタリングツールは、参加者やスタッフが 11 項目を 5 段階で評価する主観的な評価と客観的な評価を実施している。11 項目は、①創造的なスキル（歌や演技）／②自信を感じる／③人生を楽しんでいる／④健康とを感じる／⑤帰属意識を感じる／⑥やる気を感じる／⑦将来を前向きに考えられる／⑧自分自身を良く感じる／⑨他者と仲良くやれる／⑩他者と十分に連絡をとっている／⑪良好な社会的なスキル（チームワーク、コミュニケーション）である。

活かし、ホームレスの課題解決にとって重要であるだけでなく、活動の主たる運営資金が助成金であるため、ステークホルダーに対して活動の具体的な効果を分かりやすく説明し正当な評価を受ける上で重要であり、新たな資金調達の可能性を高める上でも極めて重要な業務である。

活動の効果測定は、福祉の向上と社会的包摂の向上の2つの観点で行われる。先述したように、様々な立場のスタッフや関係者によって多様な調査手法を用いて客観的な評価を行うことに留意している。そして、継続的に改訂を重ねると同時に、既存の手法を活かし高度化する方向で検討を重ねシステム化することで、評価手法とその質の担保を図っている。現在採用している方法は、2014年に既存の手法を改善した枠組みである。これまでの成果のパターンから、自信の回復、自尊心の獲得、学習意欲の向上、社交ネットワークの拡張、社会活動に参加する喜びの高まり、芸術活動に対する意欲の高まりなどの評価の各着眼点を導き出し、「Theory of change」（変革の理論）というスキームを提示した上で、福祉の向上と社会的包摂の向上の2つの観点に含まれる各項目の測定結果を、短期、中期、長期の各成果として樹形図で表示している。なお、樹形図に示される短期、中期、長期の各インパクトの内容は、逐次改訂が重ねられ、2014-2015年と2015-2016年とでは、少し異なっている（図表3、4）。

上記の成果をもたらす変数と考えられるのが、SWOの「基本価値（Core Value）」、「基本原則（Core Principles of Participation with Vulnerable Adults）」、「芸術の方針（Artistic Policy）」である（図表4）。基本価値（大望／誠実・正直／協働／寛大さ／恒常的な学び／創造性）を活動の前提に掲げ、10の基本原則（規則性／高い期待／新しいことへの挑戦／賞賛とファンの存在／創造的な人材（異なる主体）／安心できる場所／主張、肯定感、確信／測定・評価／コミュニティ／誰もが受け入れられる）の実行や達成に取り組むと同時に、芸術の方針（芸術的な大望／ホームレスでなく芸術に焦点をおく／プロの芸術家やサポートワーカーとのパートナーシップ／出演者と観衆の相互作用）に沿って活動が進められる。安心、規則正しさ、包摂性、社会的な場所を提供することで、人々は創造的になることができ、新しいことに取り組め、楽しめるとの考え方が背景にあり、参加者を芸術家として扱い、芸術的な卓越性を求め評価を行うことで、自己の再認識と発展に対する自覚、仕事に対する意識の向上につなげていくことを目指している。活動の中で苦手なことがあっても、克服できれば自信につながるケースがみられ、例えば、ロイヤルオペラハウスのような、プロの音楽家が活躍する場所での公演と称賛を経験することで、それまでの経緯や自らに対して抱いていた疑問を問い直すきっかけになったケースがみられた。2011年より、「Homeless Link's arts」と協働し、ホームレスの問題に対峙するプログラムである「Get Creative : arts for all」を英国のホームレス支援の関係機関等の芸術的訓練向けに提供している。こうしたプログラムは、SWO単独ではなく、関係諸機関と連携する中からCore Valuesとして確立されてきたものであり、SWOの経験が社会に広まり共有されつつある過程を示しているといえる。

生産年齢であるホームレスにとって、就労は最終目標の一つである。そのため、職業体験・職業紹介やボランティアは社会参加や就労への一歩になる。12週間のパートタイムのボランティア体験の機会は、社会とつながる一つの契機になっている。主に、芸術経営面のスキルを発展させるような複数の機会が用意されているが、内容は、個人の職業的発展や関心に応じて調整され、継続的または単発のものの中から、「ワークショップのサポート」、「舞台装置や衣装などの制作や舞台裏の仕事」、「With One Voiceの国際交流事業のサポート」、「オフィスの事務業務」の各分野などでボランティアをする機会が提供される。そして、そうした機会が近年

は増えている。

図表3 ストリートワイズオペラの変革の理論

《問題》	ホームレス経験者は、社会的な孤立、文化的な排除、心身衛生面の問題を有するケースがみられる	
《活動》	歌と演技のワークショップ／オペラの体験／創作と公演／仕事体験とボランティア／コミュニティアートグループとの接点	
	↓	↓
	《成果》	
自尊心の向上／自信の向上／将来に対するより積極的な見通し／創造性の向上／人生を楽しむ	社会的スキルの向上／社会関係の広がり／やる気の向上／帰属意識の高まり／友人の増加	
	↓	↓
福祉の向上→	《効果（インパクト）》	←社会的包摂の向上
<ul style="list-style-type: none"> ・精神衛生の向上 ・薬物やアルコール依存の軽減 ・身体面の健康の実感 	参加者は、人生により積極的な変化をもたらし維持できる <ul style="list-style-type: none"> ・教育、訓練、仕事との関わり ・安定した住宅の獲得と維持 ・コミュニティ活動への包含 	<ul style="list-style-type: none"> ・サービスとの契約の増加 ・他者とのより良い関係 ・他の活動への参画

図表4 ストリートワイズオペラのインパクト（2015-2016年）

	福祉の向上 (2014-2015の数值)	←SWOの基本価値・基本原則→ 芸術的方針	社会的包摂の増加 (2014-2015の数值)
長期の成果→ 例：心身状態の改善、新たな活動の取組、より良い関係性の構築等を通じて、社会に参画	精神衛生の改善 95% (97%)	(基本価値) 大望／誠実・正直／協働／寛大さ／常に学ぶ／創造性 (基本原則) ①規則性／②高い期待／③新しいことに挑戦する／④賞賛とファンを持つ／⑤創造的な人材であること（異なる主体の認識）／⑥安心できる場所をつくる／⑦主張、肯定感、確信を持つ／⑧測定・評価する／⑨コミュニティを構築する／⑩誰もが受け入れられる	他者とより良い関係を築けた 74% (83%)
中期の成果→ 例：自信やスキルを獲得し、帰属意識を高める	自信の向上・維持 85% (85%)／自尊心の向上・維持 76% (86%)／将来の楽観視の向上・維持 85% (83%)／身体的健康と関係 79%／より健康になった 82%		別の活動（特に、文化的な活動や社会的な活動）に取り組んだ 66%／新しい活動に取り組む気になった 87% (84%)／社会参加機会の増加 67%
短期の成果→ 例：人生を楽しみ新しい友人をつくる	創造的なスキルの向上・維持 91% (89%)／人生を楽しんでいる 79%	(芸術的方針) ①芸術的な大望／②ホームレスでなく芸術に焦点をおく／③プロの芸術家やサポートワーカーとのパートナーシップ／④出演者と観衆の相互作用	新しい友人ができた 93% (79%)／社会的スキルの向上・維持 91%／帰属意識の向上・維持 92%

活動状況 ↓	<ul style="list-style-type: none"> ・ 725 人参加（男性 64%、女性 36%/76%精神障害を持つ/65%が身体的障害や長期の健康障害を持つ/38%が学習困難や障害を持つ/11%が亡命者、難民、移民） ・ 64%が新規参加者、5 回以上の参加者は 234 人 ・ 451 のワークショップ¹⁴（ほかに 43 のリハーサル） Drop-in Group sessions 257/Explore Group sessions 194 ・ 36 の公演（3 つの新作、観衆はテレビやラジオを含め 15 万人）
参加者の変化 ↓	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎回のワークショップに参加する者が 16%増加 ・ 234 人が、年に 5 回以上のワークショップに参加 ・ 85 人が年に 20 回以上のワークショップに参加 ・ ワorkshopに 1 度だけ参加する者が 12%減少 <p>※上記の変化の背景は、1 回当たりのワークショップの参加者数を少なくしたこと、初回参加者に「welcome postcard」を渡したことなど。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 97%が定まった住居に住まうか、居住場所を移動した
社会参加、 就労への道筋 (103 人を支援)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 13%が雇用で就業開始/17%が雇用で就業維持/32%がボランティアを継続または開始 ・ 文化施設や音楽祭等を含む連携組織と協働し、70 の職業訓練・職業紹介の機会を提供 ・ 102 のコミュニティアートグループや催しに参画 ・ 延べ 128 人が演劇や演奏会を自主的に訪問 ・ 77 の訓練や発展の機会を提供 ・ 「The Passion」の制作時に、18 人のボランティアが、舞台と舞台裏で装置や衣装を担当 ・ 17 人が、大英博物館での English National Opera's Millions of Years の公演に参加 ・ 6 人が、マッコーリー財団とのメンタリングプログラムに参加し、個人とキャリアの発展に関する指導などを受ける。 ・ 「ambassador programme」として、ワークショップのサポートや会議やイベントにおいて SWO をプレゼンテーションする 60 の機会を提供

出所：Streetwise Opera の公表資料。

4. ストリートワイズオペラの意義

SWO の活動が始まった 2002 年当時は、1997 年に発足したブレア労働党政権の時代であった。同政権は、省庁横断型で社会的排除の諸問題に対処するため、内閣府に「Social Exclusion Unit=SEU」を設置し、社会的包摂政策を推進し、PATs (Policy Action Teams) の施策推進と Policy Action Team 10 によってまとめられた Report などにおいて、社会政策で扱われる政策課題と芸術文化を関連付ける方向性もみられた。そして、英国の文化政策の特徴の一つであるアームズレングスの原則に基づいて、専門機関であるアーツカウンシル（芸術協議会）が主体となって官民協働でアイデアを出し合い、ホームレスの社会参加や就労支援に取り組む方向性は、社会的包摂政策において就労第一であるとの批判がみられるものの、注目すべき視点・取組であるとも考えられる。英国では、2001 年に雇用年金省が設立され、就労を支援するジ

¹⁴ マンチェスター、ミドルズブラ、ロンドン、ニューキャッスル/ゲーツヘッド、ノッティンガム、カーディフで実施。カーディフでの活動は 3 年間継続されたが、資金の確保が困難となり、2016 年度で活動を中止することになった。

ョブセンタープラスで雇用支援サービスと給付金管理が一元的に行われるようになり、無業者の労働市場参加への圧力が強化され、職業体験や訓練が重視されるようになったといわれる。こうした就労第一の側面を批判することは可能だが、芸術文化と就労に橋を架ける上では、多様な職業訓練・職業紹介の機会を創出することが求められる。SWO は、芸術作品の質を追求すると同時に、芸術という独自の分野での職業訓練・職業紹介の機会を社会的に創出しており、参加者は、SWO の中だけでなく、英国に伝統的にみられるコミュニティアートの活動に参画するケースもみられる。基本価値の一つである創造性という点において、職業訓練・職業紹介の質は重要である。SWO で経験したことが、その後の社会参加や仕事に活かせるために、プロの芸術家とサポートワーカーという芸術と福祉のそれぞれの専門家との連携を深めていることが重要である。例えば、ホームレスの支援と政策提言や組織のネットワークなどに取り組む非営利組織「homeless link」と連携して、芸術文化を通じたホームレスの支援に取り組む組織向けにツールキットを協働で制作する取組はその一例といえる。また、活動の実績を客観的に評価することを重視し、定量的な調査・評価と参加者の声を丁寧に拾い上げ¹⁵、定量面と定性面のデータを社会的なインパクトと芸術的なインパクトの双方の観点で分かりやすく効果的に公表し、資金調達の円滑化にもつなげていく点は、活動の持続可能性を高め、活動の主旨や価値に対する理解や賛同を得る上で不可欠な取組だと考えられる。また、SWO の活動が10年間継続され前進しているのは、ホームレスの問題の認識や対策に社会的な変化（ソーシャル・イノベーション）をもたらしているからだと考えられる。イノベーションをもたらすその価値を社会に認知される上で、ホームレスと協働するプロの芸術家やホームレスセンターなどのサポートワーカーに対する訓練・育成を通じて活動の発展に寄与する人材を輩出している影響は大きい。これまでの取組で積み重ねられた考え方や手法を総括したツールキット「Homeless Link's Get Creative: Arts For All initiative」を通して教育が行われているが、これまでに、English National Opera、The Royal Opera House、Welsh National Opera、Opera North、Scottish Opera、Glyndebourne などから、芸術家やフリーランスの芸術家及び学生が参加している。訓練プロジェクトの発展に向けて、議論などで事業に参加を希望する人々に広く門戸を開いており、芸術とホームレスの双方への接点において、SWO のノウハウが共有され社会化されていることが大きな意義を持つと考えられる。さらに、ワークショップに参加していたホームレスであった人が、職業訓練を含む活動に参加し、SWO の Trustee となり、意思決定に参画するに至っていることも継続的な活動の成果として注目され、活動やホームレスの課題解決の革新性に大きく影響しているものと考えられる。

謝辞

本稿は、（平成 27～29 年度）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「能動的参加としてのアクティブ・インクルージョンー新しい若者の社会的包摂の可能性」（研究代表者：

¹⁵ 活動のインパクトを示す「Evaluation Tree」には、数値とともに参加者のエピソードが併記されている。例えば、舞台に立つことになり、時間を守るようになり、衣類にアイロンをかけるようになり、その後、大工の養成コースを受講するようになったエピソードなども紹介されている。就労へのステップアップの過程なども当事者の変化として重要視している。

大村和正、研究分担者：天野敏昭、居神浩／課題番号：15K03990) の平成 28 年度の研究成果の一部である。本稿の執筆に先立ち、2016 年 9 月 6 日にロンドン市内のストリートワイズオペラ (SWO) の事務所において、Matt Peacock 氏 (Chief Executive／Artistic Director／大英帝国勲章 MBE) よりお話をうかがい、資料などをご提供いただいた。ここに記して深謝申し上げたい。

主な参考文献・資料一覧

Council of Europe/ERICarts,” Compendium of Cultural Policies and Trends in Europe: Country Profile-United Kingdom, 13th edition”, 2012.

河島伸子[2014]「第 8 章 文化は人を幸せにするのかー社会包摂の文化政策」橋木俊詔監修・編著／宮本太郎監修『幸福』131-145 頁、ミネルヴァ書房。

国際交流基金ウェブサイト「プレゼンター・インタビュー (2009 年 12 月 4 日)」

http://www.performingarts.jp/J/pre_interview/0911/1.html

New Philanthropy Capital (2006) Iona Joy・Adrian Fradd ‘Striking a chord: Using music to change lives- A guide for donors and funders’.

Streetwise Opera に関する各資料 (Report and Financial Statements - year ended 31 march 2016./Report and Financial Statements year ended 31 march 2015./Annual report 2014-2015./Accounts 2014-2015./Streetwise Opera evaluation tree 2015-16./Streetwise Opera theory of change./Streetwise Opera core values summary./Homeless Link and Streetwise Opera Core Values for arts and homelessness projects./Streetwise Opera Methodology.



Canticles のリハーサル (2002 年)



With One Voice(2012 年)



The Passion(2016 年)